



永久機関のジン（１）



別句通 〈bekkutooru〉

灰色にくすんだ群小のビル街の道路を初夏の陽光が照りつけていた。

巨大都市『T O K I W O(トキヲ)』の一角にある間口の狭いペンシルビルが軒を連ねる商店街、『エレクトロシティ』。

ここに来ればテクノロジーの先端をいくものからほとんど使い道もないように思える旧時代の電子部品装置などを入手することができる。

そこを往来する客と言え、一見理知的に見えるが腹に一物抱えてそうな鉱山師(やまし)風情の研究者連中か、目を血走らせた屈強そうな男どもが多勢を占めていた。

大小さまざまな電飾を施した看板の下のそれらの店の経営者の属性もそういった客たちとそう大して変わらないように思える。

そんな街に構えている、ある店舗の軒先に一人の少年が客として来ていた。

その少年は背は160センチ半ばくらいである。

無造作に伸びた堅そうな髪に、凜とした眼差しを光らせ、額には意志の強さを想起させる濃い眉を掲げているが、片方の眉毛は眉尻半分が無くなっている。

左腕には腕時計のようなブレスレット付きの緑色のレンズをはめている。さらに肩にはギターケースを背負っていた。

またその後から彼の頭と同じくらいの大サイズの球状の物体が宙を漂っている。

それはまん丸い二の黒目と兎のような口を持ち、目の脇から手とも羽とも耳ともいえる長い翼状のものが一對生えており、球体の底からは足のようなものも二本出ている。

「いいじゃん、この部品(パーツ)、もっとまけてくれよー」

少年はそう言って右手でチップの埋め込まれたウエハーをつまみ上げ、左手にはめた鈍く輝くレンズを見せた。「ダメ、ダメ。10個以上買わなきゃまけられない。いくら永久機関士さんの頼みでもそれは無理」

店の主人はけんもほろろにはねつけた。

「しょうがないな。じゃこの値段で買うよ」

「まいど〜」

「あれ？」

少年は店先の前で駐車違反取締用三輪歩行型ロボットが停まっているのに気づいた。

「コイツ、さっきから動かないね？」

「そいつ、しょっちょう壊れてウチの前で停まっちゃうのさ。まったく」

少年はそれに近づき、ボディに両手を当て、ほんの少しロボットを見つめ、おもむろに言う。

「前輪用モーターのコイルが一箇所断線している。交換しないと」

「へ？」 「とりあえず交番まで動けばいいかな」

店の主人は狐につままれたような顔になった。

少年のお供の球状の物体は眼を点滅させて、信号音のような音声を発した。

「え？もう時間が無い？しかたねえ。おっちゃん、これ」

少年は購入した商品を受け取ると、慌てて駆けだした。

「おーい、おつり、おつりー！」 店の主人が釣り銭を握って少年を呼び止めようとするが走

り去ってしまう。

「あ」 主人が低い驚きの声を上げた。

停止していたままの取締ロボットがぎごちなくも動き始めた。

一方、この街の混沌とした雑踏とはほとんど場違いな少女が一人で、一枚の紙切れを片手にあたりをきょろきょろしながら歩いていた。

バンダナを被った頭はつややかな長い髪の頭頂部を覆っており、はちきれんばかりのボディに丈の短いTシャツとジーンズを着こなしたカジュアルな格好の少女である。

少女の名はアイこと一本松愛衣(アイ)。17歳である。

彼女の身長は170センチほどあり、歩くときは少し上半身を前に屈めて猫背になる癖があった。

「あっれー、この辺じゃないのかな〜」

アイがビルの角にさしかかったとき、もの陰になっているもう一方の道から先ほど買い物をしていた少年が走ってきていた。

アイとその少年はほぼ同時にビルの角で、出会い頭に互いに頭からぶつかってしまった。

「うあっー！！」

「きゃあっ！！」

ジンが途方もない大声を出したため、アイは一瞬感覚が止められてしまう。

そして偶然にもアイがいつもの癖で猫背になって歩いていたので、彼女の頭は背が低い少年のほうの頭とほぼ同じ高さ位置にあった。

そのため互いの唇と唇が激しくぶつかってしまった。ぶつかった反動で二人はそれぞれ後方に倒れてしまった。「イッデー」

「いった〜い」

球状の物体は困ったような目つきで信号音のような音声を出して少年とアイの周りを飛んでいる。

先に身を持ち直したのは少年である。

「すいませーん。大丈夫ですか？」

再びジンは大きな声を出し、通行人たちの注目を集めてしまう。

「ちょっと、そんな大きな声出さないで」

アイは両手をついて無言のまま座り込んだままにいる。

「平気？」

少年は一瞬とまどった。

「あの一、ぼく急いでるんで、ケガが無いなら行っちゃいますね。行くぞ！スピア」

スピアと呼ばれた球状の物体が“翼”をバタバタさせた。少年が走り去ろうとすると、アイが口を開いた。

「今」

「え？」

少年が振り返った。

「今、く、唇、重ねちゃったわよね、あなたと」

少年は気づかないふりをしていたが、少しはにかんだ表情になった。

「いや～ごちそうさまー」

少年は鳥の足跡のような目になる。

アイは上目遣いの険しい目つきで少年を睨む。

「なんで見ず知らずのアンタに神聖な初めての唇、奪われなきゃいけないの！」

「でも事故なんだもん。しょうがないじゃない」

「しょうがない！あたしの青春を返せ！」

「じゃー、どうせだから、正式なのをやり直してみよう」

そう言って少年が唇を尖らがせてアイに近づけると、アイが思い切りその頬をひっぱたいた。

「イデッ！！」

少年はひっぱたかれたほっぺたをおさえつつ、スパアとともに走り去った。

アイは泣きそうな顔で、着衣についた地面のほこりをはたいた。

気を取り直して歩いていたアイはその町の客としてはかなり違和感はある。あっても、掃きだめに鶴である。

妙齢で豊満な容姿は目ざとい店の経営者たちには注目の的となっていた。

居並ぶ店々の奥からいかにも商人、といった風情の中年オヤジたちがしゃしゃり出てきた。

「お嬢ちゃん、お嬢ちゃん。バイト探してるならウチ来なよ～。時給1000丸(がん)出すよ！」

「何言ってやがる、うちは1200百丸出すぜ！」

「なになに、君のような子なら1500でも安い！」

「おじさまたちゴメンナサイ。私、人捜ししてるんです！トキヲは初めてなんで迷っちゃって」

アイが持っていた地図を3人のオヤジたちがのぞき込む。

「うーん、これじゃ着かないよ。だって逆さに見てるんだもの」

「あ！ホントだ。いっけなーい」

アイはちまちました舌をペロリと出した。

「そんなもんじゃダメだよ～お嬢ちゃん、最新式のGPS買わない？」

「いやいや。同じのうちに買えば3割引だよー」

「何言ってんだ。うちはお嬢ちゃんなら4割引で売りますよー」

3人のオヤジたちが言い争うのを遮るようにアイは言う。

「ごめんなさい。私、方向オンチだけじゃなく超がつくほどの機械オンチなんで」

アイはそそくさと立ち去ろうとする。

「嬢ちゃん待った！その印つけてある場所になんか用かね」

オヤジのうちの一人が呼び止めて、アイが振り返る。

「え、ええ」

「そこはもしかして永久機関士たちの公式決闘(ファイト)が行われる名うての”決闘(ファイト)カフェ”『メサ』のある場所じゃない？」

「そうですよ。私そこに行きたいんです」

オヤジはアイの全身をまじまじ見つめる。

「しかしアンタ、見たところ、あんな所には縁が無いように見えるけど」

アイは思い詰めたような眼差しでこくん、と頷く。

「そこに私を守ってくれる永久機関士がよく出没するそうなんです」

(2) に続く

永久機関のジン（１）

<http://p.booklog.jp/book/76198>

著者：別句通〈bekkutooru〉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bekkutooru/profile>

*本作品はフィクションです。実際の人物・団体・事象等とは一切関係がありません。

*本作品の著作権はGK CIRCUIT LIMITEDが保有しております。

*本作品の２次利用は無償とします。ご利用される方はmail@gkccircuit.comか

若しくは<https://twitter.com/bekkutooru>

にツイート等してご一報下さい

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76198>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76198>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ